

的世界を生きた民衆とエリートの双方に配慮しつつ、社会的現実との関りの中で論じることになった。民衆の文化とエリートの文化を対立するものと決め付けず、双方の差異を認識しつつ相互関連を視野において考察したのは、著者の優れた着想である。

最後に著者はロマネスクとゴシックをヨーロッパ文明の二本の脚、すなわち繰り返して先峰を交替しながら進んだ二大原理であり、ルネサンス、バロック、マニエリスム、ロココなどの文化において両原理が交互に現れるとする。現代人がゴシックの自然で写実的な表現に親しみを感じ、神秘性・象徴性が濃いロマネスクの表現に戸惑いを感じるのには、近代以降はゴシックが主流であったためと述べる。この大きな展望について望蜀の思いで敢えて申し上げれば、著者はロマネスク世界をここまで緻密に論じてきながら、ロマネスクとゴシックを弁証法の枠に入れて整理を急いでしまった感がある。ロマネスクとゴシックの関係が極めてデリケートなものであり、後者は前者から生じつつ、前者の否定的原理となった鬼子であるとするならば、ゴシック期になってロマネスクは残滓としてではなく、どのように創造原理として生き残り、アンチテーゼになりえたのか、社会的現実を背景として理解したいと思う。とりあえず既存のゴシック理解に代わるモデルを、仮説のような形でもよいから提示しても良かったのではないか。著者のロマネスク世界論を十分に納得した上で、ヨーロッパ文明史への明確な位置付けを願うという、評者の贅沢すぎる注文である。

鶴岡 賀雄 著『十字架のヨハネ研究』

創文社, 2000年, xiv + 366 + 10頁.

山 崎 裕 子

本書は、十字架のヨハネ（以下、ヨハネと略記）を中心としつつ16世紀のスペイン神秘思想等を研究し続けてこられた著者が、14年間にわたる論考に書き下ろしの部分を加えて出版されたものである。精緻な分析に裏打ちされているという意味で、ヨハネに関する日本初の本格的な研究書と言えよう。「日本ではカトリック教会外にはあまり知られていない十字架のヨハネという人物」（v頁）と著者は書いているが、ヨハ

ネはカトリック教会内でもよく知られているとは言えず、その点においても本書は大きく貢献することになるであろう。

内容は三部からなる。第Ⅰ部「序論」はすべて書き下ろしで、ヨハネの紹介ならびに本書の採る方法と視点が明らかにされる。序論とはいえ、第1章「生涯と時代」、第2章「作品」、第3章「思想の源泉」は今後ヨハネ研究を志す人にとってよい入門編であろうし、第4章「方法と視点」は本書全体を見通す上で極めて重要である。

第Ⅱ部「道程」は、「年報」「紀要」掲載論文とヨハネ帰天400年記念刊行書所収論文による5章からなり、『ロマンセ』、『カルメル山登攀』、『暗夜』について論ずる。第1章で扱われる『ロマンセ』は取り上げられることの少ない作品であるが、ヨハネの他の作品が人の神への上昇について語るのに対して、『ロマンセ』のみが神から人への愛の過程を歌い、「人のことへの翻案・転化」が見られると著者は述べる。第2章、第3章には「『カルメル山登攀』における否定神学とそれを破るもの(1)(2)」という副題がついている。神秘体験が体験として捉えられる限りにおいて魂は有限な被造物であり、神との合一にふさわしいとは言えずに否定される。しかし、否定されない、言わばカルメル山のピークをなすものとして、「愛にみちた観念」(第2章)、「見ることと触れること」(第3章)が論じられる。第4章、第5章は、ヨハネの考える「暗夜」の構造と魂の受動的暗夜についての考察である。『登攀』では感覚と精神の能動的暗夜が語られ、『暗夜』では感覚と精神の受動的暗夜が語られる。神との合一への道程においては魂の能動性が放棄されて受動的になり、浄化と照明の道が必要とされる。暗夜の苦しみは自分が神に愛されないと知ることによって生ずる。しかし、苦しんでいることは、以前に気づいていない明るさに照らされていることでもある。炎が薪をまっ黒にして暗く醜くし、乾燥させた後に燃え立てさせて炎と同じように美しくするという『暗夜』第二編第10章の比喩が挙げられる。この例は、人が愛する時に「愛せしめられる」側面がある(170頁)ことの説明としても有効であろう。

第Ⅲ部「合一」は、5年間にわたり年1本ずつ執筆した紀要論文(第1章-第5章)と書き下ろし(第6章)とからなる。前者は、「十字架のヨハネ『愛の生ける炎』における「神秘的合一」のイメージ(1)~(5)」という副題のもと、暗夜を経て神との合一に至った魂について、合一を語る言葉(第1章)、魂の中心/神の中心(第2章)、甘美な接触(第3章)、神のかげ(第4章)について語り、第5章は「私の胸で恋人は目覚める」という魅力的な題(『炎』第四の歌からの転用)で、魂の目覚めと神の

目覚ましという目覚めイメージを介して神秘的合一の「ふたり」「私たち」について言及する。第6章では『霊の讃歌』第36歌の註解を手だてに、「合一の人称」が考察される。

本書は「十字架のヨハネの全体像についての見通しよくバランスのとれた叙述が目的ではない」(v頁)とのことなので、評者も印象に残った事柄について述べさせていただく。均整のとれた紹介を含む書評として、田島照久教授によるものがある(日本宗教学会編『宗教研究』第328号, 110-18頁)。

本書を読み最も印象に残った言葉は「イメージ系」である。本文と見出しで1回ずつ用いられている(282頁, 297頁)ほかに、注のなかで「『登攀』および『暗夜』における夜のイメージ系」(208頁), 「『愛の生ける炎』における炎のイメージ系」(209頁), 「影のイメージ系」(285頁)と5回用いられている。では、5回しか用いられていない言葉が、なぜ印象的であったのか。それは、複雑系などのように、「系」が最近の流行であるからではない。著者は、ヨハネ研究者のジャン・バリュジが使う「象徴」という語の不十分さをカバーする言い方として、「言葉=イメージ」という語を用い、第Ⅲ部で『炎』や『霊の讃歌』の言葉の性格を「イメージ言語」と名づけてイメージの論理を追求する。ヨハネには2つの叙述スタイルがあり、『登攀』と『暗夜』では一義的概念言語を主調とし、『讃歌』と『炎』では多義的なイメージ言語が中心の文体となっている(52頁)。しかし、ヨハネの教説を体系的に捉えて『登攀』の次に『暗夜』、その次に『炎』という見方はふさわしくない(53頁)。そのように考えた上で、その思想が根本的には一つの直観に支配された、一つのまとまりをもつものである(51頁)と解するのであれば、「イメージ系」という言葉を『讃歌』と『炎』のみならず『登攀』と『暗夜』にも用いることができるようになる。ヨハネの作品全体に共通して用いることができる表現として、また、イメージにつながりとまとまりをもたらす用語として、「イメージ系」が印象深く思われたのである。

著者は、視覚と対比した触覚(接触)がヨハネ本来の神秘神学のイメージ語彙であると考える。見ることと触れることの違いは、触れることが同時にその対象から触れられることでもあるのに対し、見ることの場合必ずしも見られることを伴うわけではないということである(122頁)。「触れ」はつねに「触れ合い」である(241頁)ので、魂が神に触れている時には神が触れられ、そして神が魂に触れている。つまり、魂も神も触れるものであり、触れられるものである。同様に、魂が神へと向かう時には、

同時にその裏で神が魂へと向かっていることになる(144頁)。多くの人が同じ林檎を同時に見たり歌を同時に聞くことはできるが、同じ林檎の同じ箇所を、同時に複数の人が触れることは不可能である(245頁)。この興味深い例によって著者は、接触が個人的認識であり神秘体験が私秘的であることを説明する。接触について著者がいかに心配りをして執筆したのかは、第Ⅲ部の第1章から第5章が一連のシリーズであるにもかかわらず、第3章の「甘美な接触」を初出時に一番最後に書いている(364頁)ことから推し測ることができる。

著者は、神秘的合一とは「我と汝との間で、同一の動詞をめぐり、あるいは同一の対象をめぐって、完全に滞りのない互換性が成立すること」である(315頁)と言う。この場合の「互換性」とは、神と魂が主語にも目的語にもなりうることを指し、「神が魂を目覚めさす」と「魂が神を目覚めさす」ことの同時性を意味する。それは言い換えれば、魂と神との合一が、魂と神が一つになるというよりも、「ふたり」になることとして捉えられていることである(314頁)。

本書は、「われわれはわれわれの現代の知的状況の中でしか、過去のテキストを読むことはできない」(47頁)との立場から、現代の思想家の考え方を積極的に採用している。よって『十字架のヨハネ研究』は、十字架のヨハネ以外の研究をする者にとっても、多いに触発される内容を含んでいると言えよう。

表や図表が取り込まれていることも理解の助けとなる。しかし、88頁で提示される表1は、しばしば参照することになるには見づらく、図表2(203頁)のように一部ゴチックにすれば、より効果的であったことと思われる。また、本に誤植はやむをえないのであろうが、『暗夜』が『闇夜』になっていたのは(139頁)、よくある間違いとはいえ、書名であるだけに残念である。

長年にわたり十字架のヨハネの研究を続けてこられた著者が、研究をまとめて、一冊の豊かな本として出版されたことをともに喜びたい。本として読むことにより、抜刷を拝読した時よりも多くの刺激を得ることができたことに感謝するとともに、「本書では、この著作について十分な検討はできない」(323頁)とされた『霊の讃歌』について、さらなるご研究の進展を心からお祈り申し上げます。